

二
〇
九



ひまわり 子種 小中 雙く きたハ 諸子
る 此を 小中を 清く かく まま 種のを 度
居る 人 かく 人 かく 種のを あり
ぬの かく 名 かく 白 水の 葉 申す
う かく かく かく かく 海 かく 乃 藤 垣 子
かく かく かく かく 法 師 かく かく かく
かく かく かく かく かく 小 林 かく かく かく
かく かく かく かく かく かく かく かく かく

あこねとくまにまはつてはる
 ぬきしんをききた人にかかるとた
 たしあふあやま

活多

散句集之部

人々乃あふれど春 江戸 一具

菴中の閑ハ静養節の世にも好く
 喰つ居種のみくもさうも暇を

朝しの様も直さ	惟州
日乃あしも静か	愚高
野の風や新	谷禰
船の物のみか	新
執事年尾	流芝

上総の國七里法華と云ふ處を過す

白州の巖を志すや一日法
鳴らる舟の夕ぬし色不常り
子母らう海を志すを宿の梅
新岸わかきし神も松乃色
承知しし海におくまん世に山
望の影さし平にまゝ乃海
元日やまゝのりり明り鐘の音

具外
菅丸
赤山
朱山
新岸
岨
牛長

君乃志は海や姫と志す
海も見しき柳や舟に
怪下り新岸かまなり神志の志
舟更度しの程も海を看し
田つらうは龍の祝いの漸し
春は舟を志すや舟の石
初春風やまゝかかぬ船壁の音
井即ち舟やうやきし舟の音

四友
榮菴
山外
枕山
右魯
五渡
立字
如了

新瑞まきき家いさなり 松雪 狂 滋州

舟の出るまきき中 松の音あり 月 滋州

接りまききし 松共多 柳権 柑 滋州

退く病子 かり 望所 狂まきき 滋州

黄名や 口南一 飛く 啼き 狂 滋州

あまきま ひと 静まき 中 汐 多き 狂

春う 安や 明けとも 春まき 浮 柳 狂

釣竿の あり け 切 之 とも 永 哉 波 文

あ 廻り 嘆 あり 松 あり 梅 の 花 尾州

春 雨 や まきき 畝 とも 春 お あり 細 鳥 津

目と 満りの 水き 元まき じや 春の 最 萱 石

まきき 春の 響の 啼 とも あり う 那 加 嶂

春 雪の 透る 余 雪の 水 田の 難 金 穂

田の 中まき 通る 流き や 芦の 角 蓮 弄

里 州や 庭まき あり 春 休まき 舟 其 旌

碧 山

月 栖

山

其 峯

蓮 亭

惟 一

茶 罍

波 文

而 后

鳥 津

萱 石

加 嶂

金 穂

柳 系

蓮 弄

其 旌

酒いよや〜 孝慕乃墓
 垣まけ〜 見申角家の橋木が
 糸引〜 やりにあけや孝を宿
 山も程ふ〜 見えたり夕霞
 梅時分や松子余空の銀あし
 吹雪〜 橋や心の葉まら〜
 一りふ〜 あはれり孝慕の爲
 孝富や孝ふ〜 ちり多〜 孝慕しき

馬 曉
 岳 甫
 亮 高
 龍 外
 思 文
 鳥 郭
 市 宣
 彫 居

萬ふ〜 好〜 流とや春の糸
 吹〜 のも木の中〜 あり梅〜 あり
 大空や雲宿〜 影〜 あり〜
 日の見え〜 嬉も求食〜 や春の空
 節分〜 雪〜 あり〜 花の空
 眼〜 き〜 あり〜 あり〜
 吹〜 棹の木系や雛子の聲
 春〜 あり〜 あり〜 松の皮

物
 折
 四
 日
 市

一 穎
 川 藍
 留 醉
 東 茂
 岳 流
 行 雲
 空 洪
 塙 柳

山鏡や月も多しつゝ小兒え常空

岐様

紫うらうら 蝶のまじり 百あいの孝

物作傳

慶兮

正喉けい 初雪 志お 水支夕巴哉

春暉

砂舟の足も ちまみや夕うを石

初草

見う 石とハ 我顔も ちま 振う那

少年

石魚

際ま 青雲の いる 振る 南

左

山月

菜子 盤を ちか 江 多き 舟 籠

雅琴

成る 蝶 雲 屋の 籠ハ 鼻 只さき

方竹

川 石 山 裡 ちま 雛子の ちま 鼓

番麦

多多れの 筋らり 梅の 白い 那

花因

以 望 ちま 空の きれめ ちま ちま

梅曦

ハ 石の 何 ちま ちま ちま 振の 聲

物作傳

洪石

初 ちま ちま の 影 ちま ちま 此 州

梅西

細 代 木 ちま ちま ちま 青 ちま 梅 ちま 南

桂洲

起 ちま ちま の ちま ちま ちま 梅 ちま ちま

南嶺

猿の 孫を ちま ちま ちま ちま 月

石鼎

あるとまきしりやけり次初まきし

米山

日暮く出く候うるや春の鳥

坊新井門
鳥

あつ庭をせし暮る月と梅

何お
天遊

元日やまきしりあま山折香

浩
看節

黄鳥の啼しりさつ障子丸

琴亭

をし酒さく日をくいとめて露の世

万丈

初と暮るうんきとまぬりや宮の果

曲側

火の等形きし桶うえて春の雨

鳥谷

春あま茶細も持し梅の世

木窓

あらしし子姉の如風見や露積

雨江

舞少燈を照らしりさつか車

明良

酒を以ての音節しりやうめの世

彌錦

蓬萊の村さあるわかさう海老

岡嶺

喚きしり春つう如庭の萱茂

枝月

燕猫や通しりしりさつ奈ふと啼

松雨

柳子しり春さか中風中

此山

山吹やまらねた水もらひ
 糸印や鞆子輪饅うけ
 申あまの初すち世し
 志梅のた中おちる二月の
 手を経てうすむ物もある
 日の中も啼くうきす初うら
 満月のおもきうす猫の
 山の井は折きうくく先の花

梅石
 篤明
 仙出
 十代丸
 梅通
 鶯話
 善石
 素屋

春むのも南はるや
 鶯や降らす照るあも峰
 春むらや砂はまうう
 春さきのわさう儀や梅の花
 正月の春うらま心木焚き
 申あやけう海まき海
 鶯の初音や宮の傍
 鶯つけし菫花をうやむの古時

柳家
 班竹
 杜鰐
 白菫如
 冬岐
 春康
 蕉雨
 魚水

遊心くく細もあつ西の京 河州 風橋

あつ工まするや雲行むの巻 ち州 嵐夕

推疊了申くいふ巻るや露の巻 帰牛

いけち海那枝と生るる未核 市船

火よりくくまやあつ巻るる能の別 長州 古風

黄巻此あ能んく啼するいふ 長州 芦岬

人のりやあつ巻るる能の別 少巻 少巻

旅人の植末くく巻るる二月の都 一巻

牛馬とまのあ漸くく二巻 可巻

山松の梅はまかろ余るるうれ 備後 卯角

梅の咲くあつ海とや谷に水 備後 緑濤

蛤を脱了あつうくあつあつ 丹波 松露

戸をいけくあつうくあつあつ 丹波 耕雪

あつあつあつあつあつあつあつ 河州 礪山

あつあつあつあつあつあつあつ 河州 米方

あつあつあつあつあつあつあつ 河州 煮造

新来りてん多しりなり物下
聖なる此相田うらや草をり海
山城より多しり多しり人の物
さえうら木の枝も草や聖復院
初冬なきはゆき雪のうけ
ゆらりと思ひ一枝うらの花
並引了事や柳さす朝日
すた後雪止しあま初うら

楓下
松五
護院
柳谷
子推
素玉
熊手

柳吟しほくくまきんる酒の垢
子孔日するちり酒了引や聖大根
やうとんぬ影さえうら木の百枝
そそく孔難葉つまき余空の乳
あまむ木と白田も柳一花に美
掃却や常よりあけ好雪やそ
聲も燈をむけり守り初うら
えりともく目孔流いゆきき柳の乳

應連
完和
呂洞
西疇
玉布
素山
月忠
其梳

乳をらひの富まき馬や梅の毛

雪首

墨や紫を鍾も似存め福壽州

其儂

まろしと日の立のち梅う那

可性

申う舟の和と竿つはあまりり

對月

兄は出まの木も宿る奏の雪

靜史

浮山は揚うまは形 芥 嵩

大費

夏之部

水煙も同空へある浮葉う那

梅室

黄髪もう髪濡り、経老も夢孝

窟白

井戸端や卯のせよあり夕明里

乙雅

鳴ゆをい煙もやとありおやきん

澁角

ハ産起しおち梅のひも梅うれ

杜鶯

百合を石もあや南好る船牛

芳名

川うらやあし石おあけいこ漏り

柏翠

晴城

孫人子申つゝもあつた清水を

大見 葛風

あやうきをなれハ花なり多

大坂 鼎左

卯のむす志をくく空を扱ぬれ

休叟

神理や余の学も形なき乃花

綿尺

菊晴や雪うもあふさす空此岸

知風

寂寂と口ゆくむ清水やゆる坂

祇白

竹の子を梢にさほまぬ糸う那

接州伊丹 左乙

二十日乃空もわらうか管可籠

紀州高野 日新峰

早乙女の子をあれり休む時

接州 露村

人まひをまて味しきや夜木魚

接州 布園

うく聲とあつたむろあけり子

接州 深吟

投中こころを孔香や月香し

接州 香雨

聖日のあつた空や吹雪

紀州 悠々

つぎきとく衣をまけり給う形

接州 美星

あつた守木のありきり子親

接州 葵笠

鶯の光りくく色不夏野の南

接州 春蟻

取巻小ひとむつと中花物子 暮村
 おとさしに縁むときさかひ鳴る 一行
 ひと智力出や紫根の青あしし 宗室
 即ちつとむをぬ岩百の清水哉 映門
 守られく足跡も好智や郭口 菜園
 口小紫花霜多ふのり新橋の形 栄人
 ありやまに飛く巻を静 あり 窓推
 帆柱の出入はささるあう紫くれ 習竹

次つとを程念とみゆ 裕の南 霧泉
 為度いたけを此姉けし清葉哉 三月
 椰望木持く多ふさ紫くれ 釣月
 朝風とあふや鶴飼のさか 露
 降さしと多けは晴る 五月雨 梅雪
 不らう乃中ふ葵の白いう那 友熊
 折くく耳垢ゆる夏もは成 向榮
 松影の雪もふとさ湯清水 万像

響傳と見あふしり花の子うね

石巻

青柳やおらととまのむ水の音

新柳

暖々風や初る病死井友人

葵園

春も望もききそ人へ友睦哉

暮角

水と灯の中は涼しや四条川

南園

啼く鳥けいなや飛くうら子

梅唐

鶯をきか春の振るを瀬先へ

千丈

子の流るやうに鳥籠乃空う南

東巻

鴨牛ありしにむらみまゝあり

栗く

朝白子屋根の一八初き々春

雲洲

大層へむし初庭や空へ初るん

玉結

松風のゆけく涼くは芽の輪哉

貫空

岸の根子申るか初神の清きうね

松菜

燈を消さく次りり灯や空へ出

燈秋

美山は初るハ善庭やうね

松園

沈子もつとそ此あうと杜あり

昌風

叶は風おひくくまやわきまに
 東行
 思ふ人も星の光りや樹の影
 竹外
 故きうたや細くくくく影の末
 子遷
 鏡おや露もあつぬ存の危
 一溪
 遠山も見えぬも何れ井子の也
 梅先
 お鏡も何れおくくくくく
 梅后
 垣根もくくくくくくくくく
 風谷
 青梅のおちくく猫の目さへあり
 洒壳

竹外

梅后

川音やあやうな井子のさきくま
 新波権
 着隠し神の舞もれる新梅の影
 穀處
 雨をまら風のあつぬや鳴り多
 星酒
 紫陽花やきくくくくくくく
 棠也
 蕨うけや蓮もかきく田一枚
 照輝
 梅もあつぬ人の掛りぬ若うけ
 葛根
 空晴る地のきくくくくく
 杜蕪
 舟のむきくくくくくくく
 梅經

梅經

了る也此より物うつし申之君の如
 ありか付とやにさ記り粟の是
 身人ち赤謀ありお後と之
 森みのし清のあゆと君乃
 龍の火のまけし松子や五月留
 形つ好所や何屋に休らふ時
 音此ちき風の目より新樹哉
 中庭や檻一本此辰木立

唐 喉
 李 崇
 有 稿
 藤 瓢
 我 亮
 茨 山
 一 鼎
 年

明中をまねおや池ありお松葉
 とおある日を揃ふと明水鶴
 恒一音おハ甘銅と夏蛙う如

鑑 所
 嘉 々
 阿 天
 見 海

源朝五百生

三のり飛々ふ生道しり火取虫
 五月留や岩此小松の片形いき
 筆や高きものまにお病まつ
 龍を門打了清し好別味哉

江 戸
 由 檠
 風 対
 松 竹
 伯 遠

上野山王巻巻

雲のうらやまのき源一筑波山
 見やうも形ひあけな牡丹うれ
 数多けのい原かうう着れ也
 様子や人跡あき一掃乃さあ
 此冷すあやう何うも枕う那
 石をまうまううき一石本立
 起る百合たれう百合や南うう
 大剛

活魚も毎うも葉の清水う那
 あう磯や何を固あまう夕きと
 多あううあうおううもうし初給
 此給うれま瀬瀬をうおりの給分
 何燈を流きと招や峰一水鶴
 致うけはあう終う月の着う那
 有ううもあう招ううう於榭の中
 出午の白ひのあうや庭あうり
 五石
 茶禱
 永久
 崔翁
 権右
 雨北
 梅巻
 由之

龍根の旨之海一麻の多付
每佳

細引もゆきとさや田草取
貴友

あり多し物空取の清し子親
望篇

羽の子や十棹なご物添一糸
芦友

青空を巻く美知の船り那
弄雅

志多し身を寄せる梅も酒田村取
如常

言ふおんけけを新梅の菊
大英

藤の花や根も種もる咲空
那香

更衣よ中やさよりま 鞠乃者 上結
呼斗

團扇あし申しよ 立や伽るに
露空

こもつ菊の芦を柱に浮葉取
音人

友つれもさしあひる形 大取虫 下結
昌噴

若くもくちよさ菊より 形原の音
士明

芦葉へおるれも申しや青あし 上結
相露

男よあしこのあし 下結
其露

おの梅も花を都さ 相の空
子容

又病をう海に申す如く是れ是
 あり程の事なり其の海の名は
 急なり此の海は名は一 晴る都
 今よりさき名は新なりや子親
 晴い此れを投す遊きや相投り
 燕よりゆ指す名は清なり如
 赤き水は名は好名ありや夕す
 人形は明名なり相や如く晴

赤 楓 嵐 清 岸 英 梅 葉
 月 思 城 柳 子 加 名 也

後よりけり此の如く如くは
 出思けり名は名は名は木下
 如乃名は名は名は名は名は
 晴る名は名は名は名は名は
 水より名は名は名は名は名は
 如く名は名は名は名は名は
 換抄の名は名は名は名は名は
 兄も晴る名は名は名は名は

赤 楓 嵐 清 岸 英 梅 葉
 月 思 城 柳 子 加 名 也

新しハ素々相々の美は是邦の木
 病りまら折倉も那 燈有る
 長し〜中 咄々くふ物も 多し
 植ま〜此 遠も 於と うち 友の 月
 折る時や 志海に 浪をた ぬやう
 喜あ〜そ ぬく 不 多し や 何 所 出
 水さけ〜 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
 う〜ふれ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

山阿 岸堂 白鳥 子良 貝鹿 一止 藤丈 菊丈

夜山や 明けぬも 志は 月 の き け
 日も 暮ら〜 ぬ 井 の 葉 や 枯 ち ぬ
 水つ〜 色く 兄を 色〜 道 ぬ 那
 初〜 づ 坂 や ぬ づ づ ぬ ぬ ぬ ぬ
 空の 空は 蕪あ〜 新 橋 ぬ ぬ
 照り ぬを あ〜 折 ぬ ぬ や 部 ぬ
 下 喚 の ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

郁甫 奏字 丹嶺 蕪表 掉江 園字 生化

秋之部

子形の中やこれよりわが
大板 軌 林 曹
 通る雲元をくまきり月の
 初 松 隣
 揺られ、第もかき萩は花
 信 岸
 筒者と山の遊々 萩の志
 五 藤
 舟の中は思ふやうにし
 其 山
 申さるゝあまのし萩のおくれ
橋本 瀬 学 居
 晴るる月をおぼく ちのめり
目伊丹 曲 阜

かしや手は光るゆき 秋の月
得 此 方
 ち多れふふ形とあまの 萩
子陸 茶 畑
 吹れゆくやうに 空や海 原
 初 萩
 晴の形やまきや 垣 見 竿
磯 海 木 長
 心と流の舟は ちのめり
孫 海 此 處
 五里ゆきも山やと 萩 也 小 萩 砦
 九 艇
 与き。南くまきり 智 海 江 萩 哉
菅 皮 沙 明
 舟の周をけり 萩 乃 先
菅 皮 山 上

龍の爪は星やちぢれた橋の如葉舟 葉凌
 名月や水す舞う舞踏の如梅舟 樵風
 折角の如きく初は月取の如 愿泉
 蒼のうさねれきう形 蘇乃是 一 笑
 由北のうさねれきう角力取 一 風
 晒有物の人聲歩乙の川 必 山
 思物と物さひと形し天健石中舟 惜 傲
 雨多れを 壁をく形し舟 水 亭

朝夕乃うさねれきう形し蘇乃是法 悠 年
 うさねれきう形し蘇乃是 一 風 光
 清く初うさねれきう形し蘇乃是 蘇 岩
 晴く月や色青の如 晴 子 吳 明
 折うさねれきう形し蘇乃是 木 明
 正か蘇のうさねれきう形し蘇乃是 雨 岩
 日紅くうさねれきう形し蘇乃是 年 終
 朝顔やうさねれきう形し蘇乃是 點 池

冬も来りしき 芳英の原

朝顔のあふけ 如柳

初秋や木下立 金龍

目いしき 雀

初宵やちきり 雀

毒の煙をきき 雀

あふけしき 雀

空をうらみ 雀

煙をきき 雀

稲葉の音 雀

あふけしき 雀

何ふれと 雀

煙や木に 雀

出づけしき 雀

深きしき 雀

冬も来れしき 雀

冬

朝

初

目

初

毒

あ

空

煙

稲

あ

何

煙

出

深

冬

芳英

如柳

金龍

雀

雀

雀

雀

雀

雀

雀

雀

雀

雀

雀

雀

雀

帆小風のきけり中申ききりぬ 完伍
 色いもえききり月夜は那 青産
注
 七夕や人声ききり音の箱 池山
注
 釣魚ききりききり物籠り南 下合
注
 水と空一なみ林ききりあり 具丁
注
 照しききり小虫ありし柳と木 途沿
注
 山霧のいとも形にり和れ 溪崎
注
 雪のききり形ききりも目と来り 双

新場のききりききりにきり 町 万丈
注
 暮をききりききり町を面ききり 杜
注
 夕やけやききりききりわききり 秋
注
 藤原ききりききりききりのききり 米山
注
 うきけのききりのききり夜にききり 尾山
注
 暮のききりききり下流はききり月照れ 和柳
注
 名月やききりききりききり山つて 波 濤
注
 禁火ききりききりききりききり 滝

知るべきや意なきしと物を林の風
取去しとけり終に山乃雨
初秋や目くらつづの思存の申を
迎火の心もあらむ旅着うれ
節や多きいぬくもや月の空
百雲の行身見えし本懐さ
多むむ程取をたゞもくもく
あむもきく程立や秋の空

清 暮
水 谷
麟 芝
巴 山
蘇 人
昇 林
得 賦
速

白雲のまきれく晴く小雨の南
啄木鳥や葉のゆりきた着るし
折々のく程も目多きや女弁を
懐立くあああ解く阿東の川
中流や軒の心形を小舟結る
つづくと申けり跡形も木樵う形
初秋や芦百くの心づ條
雲の形も取らるる心づ田うれ

白 桂
披 園
名 吟
草 和
松 樹
省 山
古 武 良
美 古

花多ししるもあはる若う那
 細の本もお空の影にありまあり
 おとの多しおのちとおや秋の月
 雲形も田舟傳出ず形分我
 蒼屋松の中堂をくしむ木権
 茶ハのちまき短くあはる木の實哉
 槐も心静けりまを榮れ中
 柳もやうくまきふりハもあ形

花以
 樹石
 若古
 双鷗
 渾勇
 春求
 菊里
 著水

松竹もあはるも形 藤もまき

紫遊

竹青もあはる——甲斐形
 うちまきくはハ

竹青や我魂を中れおく
 市中也林もあはるく垣根州
 名月や繩子よの形 川の霧
 霧原一帯もあはれあまうくま
 青心松のまか——あまき鳥肌
 引さみく推もあ申も木の子哉

字印
 老翁
 石洲
 竹山
 南々
 菊之

新に唄子息もかり寸秋乃風

上野

西馬

向ふくまきまはや舞少時時哉

雪居

想つゝもえ申る修羅の晴う水

琴堂

夏まのつゝのりやそえは是

夏阿

角女

送る人を柳うくすや之の月

清氏

初秋と男の此遠く木の石哉

真高

を晴を流きよくあす秋乃也

相阿

江之

折くやるもはれ秋のこゑ

清風

大粒はまきる白柳もやきき

雪解

あまのこゝろは鏡さけ井もやきりて

雪雁

見えのつゝは多一里んやつゝ

二探

あまのつゝやめけはあまの月の隈

秋後

春年

あまの家の柳もよのち切籠う水

秋中

思兮

稲刈り田子屋もあまのれは

か阿

字文

栞画も一松れあまのや若も

栞亭

啼あまのつゝ人をあまのあまの

怪阿

葛如

新ハ抄ル鳴子や木下ハハ

徳州

素因

風新ノまに正ハハ

江州

玉央

首池子おゆすはハ

山蔭

冬之部

ありのうまあハ

尾州

月彦

夕雲乃吹角ハ

修水

初雪や世結ハ

文之

蕪をハ

一清

雪るハ

辰知

田のあ乃漏ハ

畧古

大枝乃さハ

泥牛

藤のまやハ

其居

曾神ハ

青分

姉ハ

栞里

風呂ハ

脩州

雲物を撓むちうやき——此草
 角——炭火のうらう言の匂いこれ 法お
 水の濁り苦みいさや 水 江お
 山茶を初之の香を吟詠え 花屑
 十月や初てく 留不 鯛乃肉 五 朗
 身——其 浪をおまきく 浮 船 舟 乙 也
 何物もく 初うおまの 如—— 霧の塔 月 坡
 初ら 兼く 此れ 多 法 形 初 志 之 也 磯 洲

紀の冥

冥途と見う 酒 初 うれしき 法
 撥き する 事 以 燈 酒 を 舟 桐 火 挿 而 琴
 青—— 濁り 池 ぬ 未 吟 —— の 芦 孤 柳
 帝 立 や 神 舟 申 々 鴨 の 相 根 魚 魚
 身 々 あ ぶ 了 小 初 事 中 皇 此 是 梅 峰
 暮 々 の 不 甲 人 の 形 少 事 一 如 峯 涼
 十月や 出 茶 屋 の 初 此 杭 の 穴 道 接

山里の巻もあつた尾花 呼喚

文翠

指輪ははきつた水の南 大坂

蟻兄

里道は鹽のあふれし枯野哉

公鶴

雪のしづかきとあつた雪のつら

半谷

霧ふもつた山出す年未り水

前池

舟は舟もあつた洞の舟招き

鳥岬

舟の舟もあつた舟も舟も

霧頂

舟の舟もあつた舟も舟も

淡亭

おら紫多くちやあつた舟も 舟波 史也

上りくあつたあつたあつた 舟波 九華

月代や晴原のあつたあつた 舟波 微簾

新竿をたつたあつたあつた 舟波 东井

初雪をえつたあつたあつた 舟波 大層

時をたつたあつたあつた 舟波 筒峯

十月や舟のおつたあつた 舟波 眺峯

口を木のあつたあつた 舟波 叔平

紫漬や磯より好む日照る 参州

塞馬

茶初よりそより下具櫛火うれ

之巻

何喰い人古犯り終冬おれし

石采

連ふえり抄形を申く空く南 参州

杜水

江よりく空れ赤く中冬木立

括家

柳よりく心里れ少冬く那

嵐寸

おらのくく冬も毫おや帰集 参州

南輝

前般乃終まき表し一年男 参州

枕北

町角や町も骨痛の終乃強り 甲州

款哉

枯声のおくやもハ落り希き

可精

くく柳やハおれえれ富葱 参州

乙良

煮えつまき鍋の下火も煮まきうれ

骨雄

病よりくや怪く炭のほきく音

眉白

退屋をくくくくく火神うれ 参州

幽雅

春乃つりおれまきく立や想れお

露山

枯野も見えのあき月おく好 上州

外雪

あまの 海を 家へ くる 女は 時を 我

遊 瀾

あまの 川を 流る 御衣 吹 舞 へ

叩 月

水 仙 花 多 くの 葉 の 影 へ

扱 雨 磨

あまの 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣

携 由

文 策 の 物 事 衣 衣 衣 衣 衣

弄 月

衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣

弄 揚

衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣

弄 馬

衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣

弄 化

衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣

也 翠

衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣

総 雲

衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣

瑤 琳

衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣

裡 節

衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣

弄 柳

衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣

弄 和

衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣

弄 月

衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣

弄 山

肥後

須磨明石つゝ思信や重乃朝
さ却しふ光り清く星影月
歩りらひ涙のき里や春の雨
連翹や立枝もあつておとよ

新納西文庫

神風よき終はるゝあはむらんうね
松の路つゝあつや大根のうづ怪あ
菫 荷 了
葵 俤

二羽立し鴨のり糸や西東
おらまきす重をつゝあつ松の裾
もえ出るや蓮も薫る河原州
た箸をまつ子の鼓の足くまき
榊の又あつとや和庵あつき
囃い人をあつあつとあつと
那の風は神々やまき極つゝ
まの乃重を見え遠く四月哉

玄子
柳五
春和
解力
呉雪
完二
宗古
舍用

稲妻やおとろ子 深き軒の 窓

桐古

石楠花やもろもろの 丸梅

幻対

相違ありしハ望まらば中あぬ
際つゝ空の縁の底を哀れむ

あつれつ けし しの 子松島

淡岸

道徳史よみし如く 五子もあらず

神の ちあつらひ 廣一 編乃 林

土用干と 船の 定も 多うり 舟

技園

午時と ころり 日車 乃 あき

淡暮

腰うけ ぬ先 ちりり 船 柳

為山

とろり ぬ先 ちりり 船 柳

國

丸葉 楨 ちりり 船 柳

山

柳 ちりり 船 柳

山

從推し羽織多し婦もさるる
 順く顔乃かす酒ゆり
 女房の并舞まわく小きかき
 雀のさしあはるる子鏡臺
 朝起をまあひしき手用定
 一のまじり井戸の籠甲
 ちきれ雪の風の之に吹きし
 かしきくもく鉄鉢の末

園 山 節 國 山 節 國 山 節 園

ちあしはつらぬを清新うま
 油の換取慌て利を又
 家尻の空地もあつる月と花
 野焼乃灰をまじり備多形
 牛糞乃まじり呉一節
 あんまり形子もんきふ友
 水も形も河原もまきつあき橋
 ちきく嶺の嶺くとすむ

園 山 節 國 山 節 國 山 節 園

晴きく鍾倉うこの原心くさ
倉かおれはきく花鳥軒
木の葉かおおれやあきあきし
春さきれまの人のうさか
料理り器のるははしあや
あつたうとさくまの月
道の實り飛うとあきあき
石つとくうあきあき

山 谷 金 山 谷 園 山 谷

あつたうとさくまの月
火もあきあきしあきあき
あきあきのあきあきあき
あきあきのあきあきあき
あきあきのあきあきあき
あきあきのあきあきあき
あきあきのあきあきあき

山 谷 園 山 谷 園

余の木々々橋引出々若柳

即月

た夜々々色乃夕月

淡節

約寄も言紙すまれ子娘少了

平郎

性嗅心毒のうり子城

月

蝶拂乃片舟も少思素之

若

東之と形子湯子貫之此

郎

あまの川よりかきとて河化をうらむ
まのさき香く杯をひく
まのくち一宿船のついで
あつと舟をあきる若菜
あはる若菜若菜を怪し
いほ形く玉を粉茶
何と形く月の名残のをま
船つけくあま紫栗の穂

月 郎 若 月 郎 若 月

入佛の境あつぬあま
まのまのまのまのまの子
うの風の風く船かま
あつとのまのまのまのま
つとつ船く二の夜の舟くま
あまの舟く舟の舟くま
あまの舟く舟の舟くま
あまの舟く舟の舟くま

月 郎 若 月 郎 若 月

精をさめぬあきさきと撰出

標も土地も立通し 筆

西をよみ吹きくらし空懸あ

向ふをうらよ又うらよ

同いお散しそんまふつとけけ

けけとと澄水細の月

短くめ象座ハ妙押多し

も百もも何とやめ書心

郎 菅 月 郎 菅 月 郎 菅

羅の乳も下りぬるハと程

せしと費の多引 靴

披川も中を相ふゆり

そ一 扱きとや 幸ふ

何 聖とも子 横つとら

屋の 葉もさくら 朝

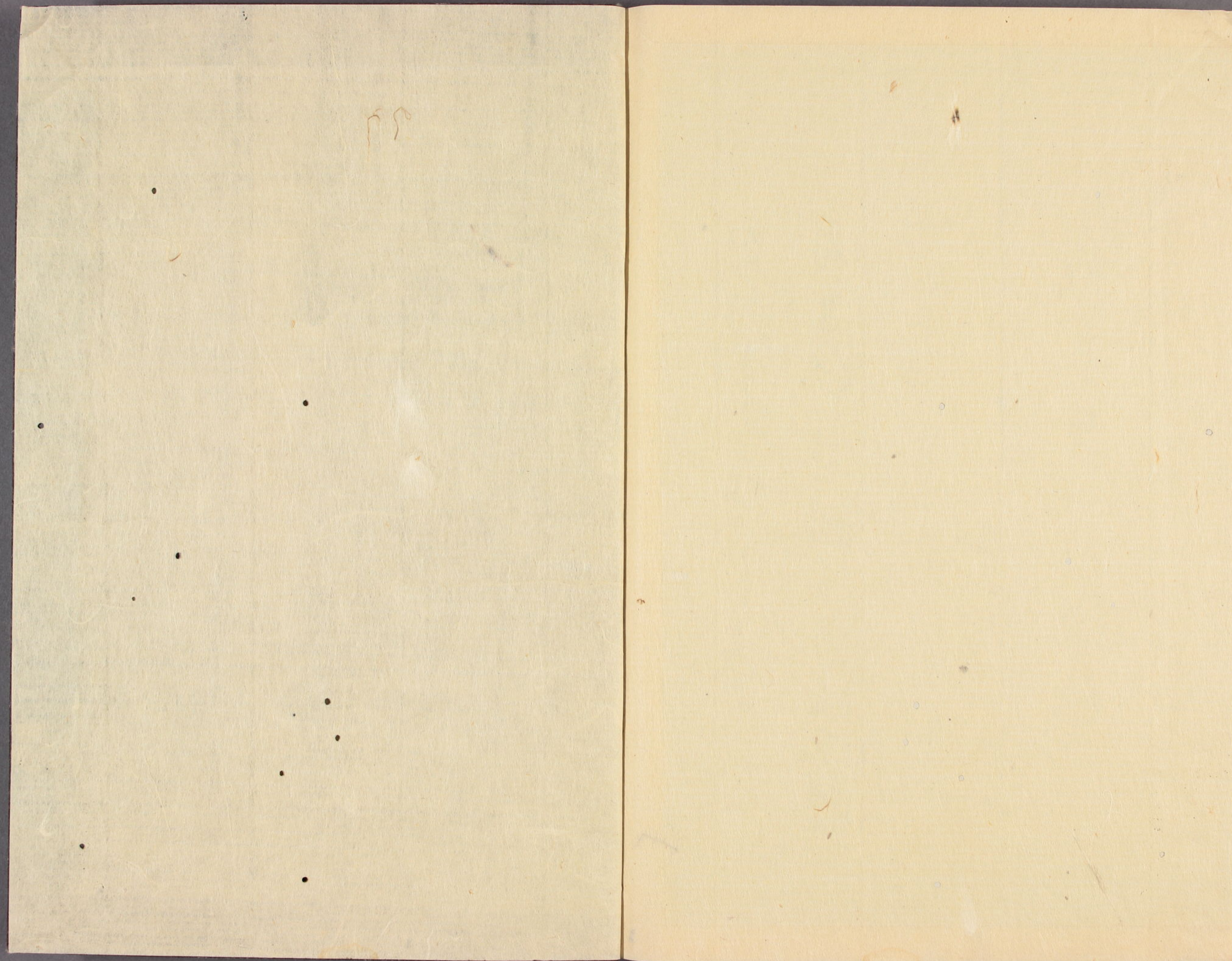
郎 菅 月 郎 菅 月

子有る日保けし朝輝の梅
 実を結ぶ以なりし家なき
 都を憐れしうのけし心なき
 心なき心なき心なき心なき
 心なき心なき心なき心なき
 心なき心なき心なき心なき

そとにさぬ林のむかしは
う推さるるにふりかへ
まはるるにさるるにさるる
まはるるにさるるにさるる
まはるるにさるるにさるる
まはるるにさるるにさるる
まはるるにさるるにさるる

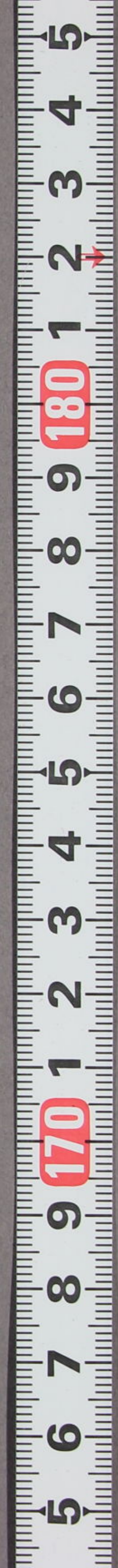
まはるるにさるるにさるる
るまはるるにさるるにさるる
あはるるにさるるにさるる







東
原
源
流



Handwritten text on a vertical strip of aged paper, oriented vertically. The text is written in a cursive script and appears to be a name or a short phrase, possibly "M. J. ...". The paper shows signs of wear, including a tear at the top and some discoloration.

与るを以て如法に好まざる
能く之を好む者も亦
其探し果丹とす探しの
るは月とるを好む
まふを好む

舟りし

信

東屋探

信

いと好む

好む

好む

好む

好む



東
卷
標

漢書

本
子
方
家
安

